

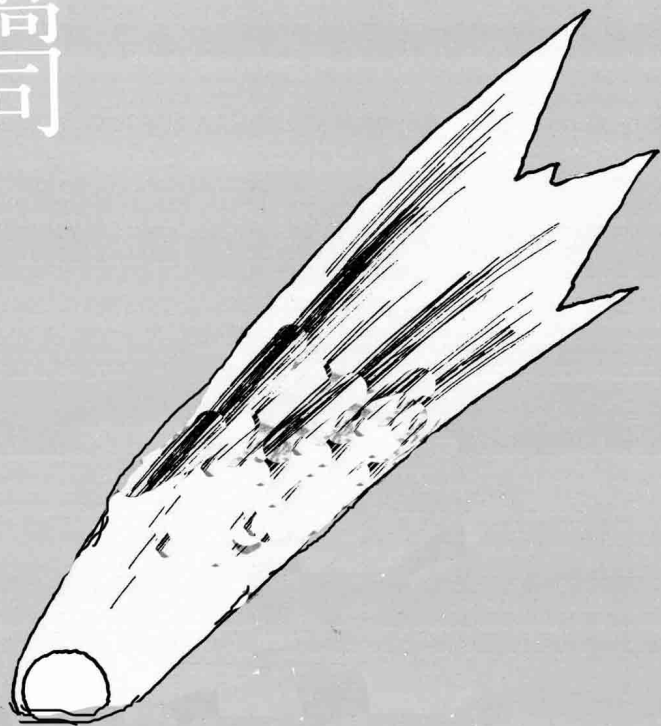
彗星伝説

石川喬司



川喬司

星伝説



彗星伝説

昭和57年3月31日 第1刷発行

著 者 石川喬司

発行者 三木 章

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

振替・東京 8-3930

電話・東京 (03) 945-1111 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定 価 980円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取りかえいたします。

© Takashi Ishikawa 1982 Printed in Japan

ISBN4-06-119142-X (文三)



目次

頭ごつつんこ	5
幻想カレンダー	63
超能力ごっこ	127
印刷の鬼	145
最後の賭け	151
いまひとたびの	161
C型ロボットの謎	171
彗星伝説	197

装丁・本文カット／矢吹申彦

彗星伝説

頭
ご
っ
つ
ん
こ

天地創造の第一日に、神は諸悪を祓うことの出来る魔法の一文を記したもうた。それがはるか後代に伝わるよう、又偶然がそれに触れることのないような方法で書かれたのである。それがどこで、又いかなる文字で書かれたかは誰ひとり知らないが、今も人知れず永らえており、いつの日か選ばれた者がそれを解読するであろうことは疑う余地がない。

——ボルヘス『神の書跡』（篠田一士・訳）

1

その筆跡は死を目前にした八十二歳の老人とは思えない力強いものだった。特製の原稿用紙の柀^{ますめ}目をハミだして、大きな字が躍っていた。

「君はビッグ・バンの音を聞いたか。」

すべての秘密は　いま



陽子は老詩人、沼聖一の絶筆となったその二行の未完の詩を黙読してから、改めて問いかけるような視線を児玉記者に向けた。

児玉記者は、学芸部の自分のデスクの上に置いたその原稿用紙を、丸っこい指で叩きながら、「いや、参ったよ。死因は明らかに心臓発作なんだけど、現場の状況が奇妙だというんでね、すっかり容疑者扱いされちゃって……。みんな君のせいなんだぞ」

「すみません」

陽子は頭を下げた。「でも、まさかこんなことになるなんて」

「あはは、冗談だよ。本気で怒っちゃいない。君のような美人に頭を下げられると、俺は弱いんだ」

兎玉はあわてて手を振った。「それにしても、おかしい話ではあるね。選りに選って、俺が訪ねて行く直前に急死するとは」

「ええ」

陽子は、もう一度、沼聖一の遺稿に目をやった。この二行の詩に、どんな謎が隠されているのだろうか？

「ビッグ・バンというのは、宇宙の始まりの大爆発のことでしょう？」

「そうらしいな。俺も天文学には強くないけど、要するに百五十億年から二百億年ほど前に、そのビッグ・バンと呼ばれる大爆発があつて、俺たちの住んでるこの宇宙が生まれた——というのが、どうやら最近の天文学の定説らしいね。じゃあその大爆発の前はどうなっていたのか、といううと、それは専門家にも判らないということで、シロウトにはチンプンカンプンだが」

「沼さんは宇宙や星のことに随分詳しかったみたいですね」

「そりゃまあ戦前から天体派詩人と呼ばれていたくらいだからね。でも、どちらかというと、科学的な知識というよりも、オカルト的な関心の方が強かったみたいだな。現に、死んだとき机の

上に置いてあったのは、この原稿の他は、ユダヤの秘教カバラの聖典『創造の書』と、平田篤胤の『神字日文伝』の二冊だったからね。この二冊の本の間に原稿用紙を置いて、その上に俯伏せになった形で、じいさんは死んでいたんだ」

「……………」

「どうみても執筆中に心臓発作を起こした、と考えるのが当然だね。ところが不思議なことに、じいさんが肌身離さず持っていたはずの心臓発作の常備薬ニトロールの錠剤を入れた瓶がどこにもみつからないんだ。おまけに部屋の数までなくなっている」

「じゃあ、もしかしたら誰かがこっそり部屋に忍びこんで……」

「うん。その線も考えられる。それに、もっとヘンテコなのは、じいさんが死ぬ三日ほど前から、真夜中に口論する声が、じいさんしかいない筈の部屋から毎晩のように聞こえてきた、というんだね。これは、沼末亡人——いや、内縁関係だから未亡人というのはおかしいか、じいさんは戦後まもなく最初の奥さんと別れて以来、ずうっとお手伝いさんと暮らしてきたんだ——そのお手伝いの婆さんの証言だ。しかも、その口論の相手の名前がコダマと来ている」

「コダマですって？」

「そう。だから、俺が容疑者扱いされちゃったのさ」

児玉はズボンのポケットから汚れたハンケチを取出して、汗を拭いた。「婆さんの証言では、じいさんはしきりに相手をコダマ、コダマと呼んで怒鳴りつけていたらしい。昨夜も『コダマ、

とうとう貴様のシッポをつかんだぞ！」と叫ぶ声のはっきり聞こえてきたそう。コダマと呼ばれた相手の方のセリフはボソボソとよく聞こえなかったらしいけど。とにかくそんな話を警察が婆さんから聴取しているところへ、この俺がこのこと現れたもんだから、取っつかまってエライ目に会ったってわけさ」

「どうもすみません。ご迷惑をかけて」

陽子は前よりも深く頭を下げた。「あとで編集長をお詫びにうかがわせます」

「まったく、ウィークリーの編集部からたっぷり慰謝料をいただかなくちゃあな」

児玉は前歯の欠けた口を開けて笑ってみせた。「それはそうと、おたくの編集部に電話してきたという男は、一体どんな情報をつかんでいたのかなあ。電話に出たのは君なんだろ？」

「ええ。若い男の人の声でした。話した口調で、『愛読者ですが、むかし活躍されていた詩人の沼聖一さんが今もご健在で、最近何か面白いことに取組んでいらつしやるという噂を聞きまして。ぜひ取材して知らせてください』という内容でした。名前を聞こうとしたら、一方的に切れてしまったんです。そこで編集長に伝えたところ、古い詩人のことなら学芸部の児玉さんが詳しいから取材を頼んでみる、ということ、先日、お願いに上ったわけですが……」

「うん。俺も沼じいさんには久しく会ってないんで、ちょうどいい機会だからと、今日ちょっと暇ができたんで出かけてみたのさ。なにしろじいさんのところは電話がないんで、直接訪ねて行くしか手がないんでね。そしたら、なんと……。これは偶然なんてものじゃないかもしれんぞ」

「で、警察の方はどうなりましたの」

「まあ状況はいろいろ奇妙ではあるけれど、奇妙といえば沼じいさんの生活自体がそもそも奇妙なんで——言い忘れたけど、じいさんは今もって敗戦直後に建てられたブラック住宅に住んでるんだよ。防空壕を改造した地下室が書斎になっている。だから部屋の鍵なんかあるうがなからうが、たいした違いはないし、お手伝いの婆さんが聞いたという口論にしても、毫^も碌^{ろく}した婆さんがじいさんの一人言を錯覚したのかもしれないし——いづれにせよ、じいさんのトシからいって、深夜の発作による自然死とみるのが妥当だろう、というところに落着きそうだな。もちろん他殺の疑いがなくなったわけではないので、俺も、いつでも参考人として出頭するという約束つきの放免さ。そのとき、この原稿を、前から依頼してあったものだからと嘘をついて、強引に持ってきたんだよ」

「これは自筆ですか？」

「ああ。じいさんは昔からこういう威勢のいい字を書いていたよ」

「心臓発作を起こす直前に、こんな力強い字が書けるものでしょうか？ 筆圧もかなりあるようですし」

「そうだな。その点は——」

見玉は机の上の沼聖一の遺稿に視線を落とした。

「空白のところに、なんだか模様のような跡がありますね。一枚前の原稿用紙に大きく書いた字

の跡でしょう？ 何て書いてあるのかしら」

「そうだね。ちょっと復元してみるか」

児玉が原稿用紙を持ち上げて斜めにかざそうとしたとき、目の前の電話が鳴った。

「はい、学芸」

受話器を取上げた児玉は、急に声をひそめた。「やっと捕まえたか。誰だ、そいつは？ うん、すぐ行く」

児玉は立上った。

「悪いけど、野暮用ができた。この件については、後でまた相談しよう。ああ、それから——これを読んどくといひよ。沼聖一のエッセイ集だ。何かの役に立つかもしれない。それじゃあ」

陽子に古ぼけた一冊の小型本を手渡すと、児玉はいそいそと机の上を片付け、メモ用紙に走り書きをしてから、編集局の出口に向かった。

メモ用紙には、こう書かれていた。

「君はボン・チーの音を聞いたか。」

すべての役満は、いまわが配牌にあり」

どうやらさっきの電話は、麻雀の四人目のメンバーがみつかった、という連絡のようだった。

（沼さんのお通夜には行かなくていいのかしら）

陽子は苦笑しながら、そう考えた。そして児玉から渡された古本を小脇に抱え、出版局にもどる

ことにした。

彼女の心を、不思議な予感が包んでいた。あの愛読者と名乗る若い男からの電話を受けたときに感じた予感——自分の人生を変えてしまうかもしれない何かが起ころうとしている、という予感が、一層強まっていた。その予感は、小脇に抱えている古本から激しく湧き出て、彼女の心に流れこんでくるようだった。

2

その夜、陽子は、沼聖一のエッセイ集『われは星の子』を、一人暮らしのアバートのベッドに寝そべって読んだ。

それを読み終ったとき、彼女は衝撃で眠れなくなってしまった。

彼女を眠れなくしたのは、巻末の『謎の言葉』という、つぎのような文章だった。

へ 謎の言葉

世界三大リドル・ストーリーというのがある。有名なF・R・ストックトン『女か虎か？』（1883）、マーク・トウェインの『怖ろしい中世のロマンス』（1871）、それにクリーヴランド・モフェットの『謎のカード』（1896）である。

『謎のカード』は、趣向がちょっと変っている。主人公はリチャードという名のニューヨークっ

子。彼は旅先のバリで、見知らぬ美女から一枚のカードを渡される。カードには紫色のインクでなにやらフランス語らしい文句が書かれていたが、フランス語の読めない彼は、ホテルの支配人にそれを読んでもらったところ、支配人は顔色を変えて「いますぐこのホテルから立ちのいていただきたい」といった。彼はさっぱり訳がわからないながら腹を立てて、別のホテルに移り、この主人に事情を話す。

「そんなバカな。どれ、私とそのカードを読んであげましょう」とにこやかにカードを手にした主人の態度が一変した。「お気の毒ですが、ムッシュー、私どももあなたをお泊めするわけにはいきません」

憤慨した彼は、こんどはバリに長期滞在している古い友人を訪ねて、カードを見せる。「おお、なんということだ。君は本当にこ、これが……」友人は頭をかかえ、「まったく申し訳ないが用事があるので」と姿を消してしまった。

すっかり途方にくれた彼は、仏英辞典を買って、自分でその文面を翻訳してみようとしたが、チンブンカンブンで要領をえない。そこで思案したあげく、定評のある私立探偵のところに相談をもちこむ。探偵は答える。

「いまのところは、これがどのようなものかご存知ない方がいいでしょう。明日かならずホテルにおうかがいし、そのとき何もかもご説明致しますから」
「という、それほど容易ならんことなんだね」